

平成 23 年度

事業所名 : グループホーム だんけ胡四王 A棟

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	03705000639		
法人名	特定非営利活動法人 花巻東雲会		
事業所名	グループホームだんけ胡四王 A棟		
所在地	岩手県花巻市胡四王一丁目15-5		
自己評価作成日	平成 23 年 11 月 14 日	評価結果市町村受理日	平成 24 年 1 月 27 日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0370500639&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成23年11月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・立地条件の良さ 新花巻駅前に在りながら自然がいっぱい。すぐ近くに熊谷家、賢治記念館、博物館、イーハトーブ館、新花巻駅などの文化圏にあり外出先となっている。 ・きめ細かい対応ー24時間シートを利用し一人一人に合った介護を実施している。 ・医療機関との連携ー近くの開業医から強力な援助があり受診時、看取り時の協力をいただいている。 ・近隣との関係ー毎週近隣の方々との交流がありお互いになくてはならない関係となっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>グループホームだんけ胡四王は花巻市の中心市街地より東方、新幹線「新花巻駅」前に位置している。豊かな大自然と市文化財「熊谷家旧宅」や「宮沢賢治ワールド」圏域の中で、地域とのつながりを大切に近隣の高齢者ボランティア団体「金ママ」を中心に事業所の一部を地域交流スペースとして開放し、開かれた事業所として地域一体的な絆の構築を目指している。利用者支援も「24時間シート」を活用した気配りのある継続的な支援が提供されている。終末期の支援も「医療との連携」が確立されており、これまでの経験を活かした「看取り」を基本に質の向上を目指し研鑽を積んでいる。事業所周辺は建物が込み合っていないため見晴らしがよく、新幹線の往来も眺めることができる環境は利用者の安らぎや様々な気持ちの高揚にもつながっている。豊かな地域資源やゆとりのある設備を背景として、地域生活の具体的な場面が様々な形で実現されている事業所である。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

平成 23 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム だんけ胡四王 A棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を事業所の中に掲げ理念の共有のために毎朝唱和し、共有し実践につなげている。	開設当初に管理者が作成したものを毎朝のミーティングで唱和し、特にプライバシーに配慮しながら支援に活かされている。個別には「実行シート」を活用しながら理念を活かし「実行・報告・評価」を全職員で実践されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の中にあって地域の行事(熊谷家の催事)等に参加し、地域の方々との交流もある。	毎週定期的な「金ママ」との交流や空き部屋を地域に提供し、地域交流スペースとして活用されている。震災の被災者に空き部屋を提供したり、ポーランドからの「宮沢賢治研究」者にも宿泊頂いたり、「ブドリ舎」での利用者作品展示など、積極的な交流となっている。	「金ママ」とは毎週金曜日に事業所で1日を過ごすグループ活動で、地域交流の場面としてユニークなものとなっている。また法人は地域の文化振興も重要視しており、今後も幅広い視点から地域を大事にしていく姿勢は期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎週金曜日、地域の高齢者が当施設に集い、利用者との交流を楽しんでいる。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度すでに、運営推進委員会を4回持ちサービスの実際の取り組みについて話し合い、活かしている。	2カ月に1回の運営推進会議は地域包括支援センター職員や近隣住民、金ママメンバーなど事業所に親しんだ人で構成されており、話しやすい場となっている。OJT研修の報告や、新採用職員の事業所への意見や感想なども取上げ、報告している。	運営推進会議開催の時々、利用者に関りのある方や行事等に関連する方々にも声をかけてみるなど、今後広く多様なつながりを作っていく取り組みにも期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市にもパンフレットを置き、サービスの取り組みを積極的に伝えている。	日常的な支援のなかで行政への相談は殆どないが、介護保険第5期施設申請会議に参加した折に連携を持ったり、市で開催する会議には参加しており、新規事業開設について相談している。3/11の震災には、市の職員に2度の訪問を受け支援物資を頂いた。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアに積極的に取り組み研修会参加、勉強会、ミーティングで理解し実行している。	「身体拘束をしない宣言」を実践している。外部研修や内部での学習会等を通し、全職員に徹底を図っている。かかりつけ医との連携のもと投薬の調整・福祉用具の工夫等で利用者の生活状態が改善され表情が豊かな支援となっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ミーティング、勉強会を持ち職場の意識を高め防止の徹底を図っている。		

[評価機関 : 特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する青森市での成年後見制度研修に参加、後日職場で勉強会を持った。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際に、利用者、家族に契約書に沿って説明し、理解、納得し署名してもらっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約時に、運営規定を示して説明し理解、納得を図っている。職員には採用時に、外部には、運営推進委員会などで説明している。	以前、家族会を開催していたが、集る人が年々減少の為、現在は休止している。利用者・家族からの意見・要望は毎月の利用料支払い時や通院時などに聴いている。通院支援の要望は家族から多く、その対応に多くの家族から信頼を得ている。	家族からは厳しい意見が出される事もあるが、それは率直な関係が築けている結果であり、事業所にとって向上のチャンスでもある。多様な意見を検討していくなかで、職員やサービスのさらなる向上につなげていってほしい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎週月曜日と金曜日にミーティング、勉強会で意見、提案を聞いている。毎日の業務の中でも聞く機会を常に設け反映させている。	管理者がミーティングで職員からの意見要望・提案を聞いて、その場で直接職員に回答しており内容が共有されている。又、職員個々との面接も重視しており、その時々的心情を管理者に伝えることができている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の状態が良くなければ良い介護はできないので、全ての面で配慮しながら仕事に従事している。 就業規則を設け労働基準局監修の労働時間の管理、全国の給与水準より低くならないような設定をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	・OJTを取り入れ働きながらのトレーニングを実行している。 ・研修できる機会を逃さず研修会に参加している。 ・学習委員会を組織し自主的に学習にも取り組んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他事業所の職員と交流する機会があり(矢沢農協交流会7/17、市説明会11/11)参考意見としサービスの向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	・入居時に家族、本人から不安、要望を聞き困っていることなどを話してもらい、信頼される関係づくりの体制を整えている。 ・24時間シートによるきめ細やかな対応をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時に家族とよく話し合える時間を設けて良い関係づくりに努めている。家族来訪時には必ず話し合う時間を設けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居時のアセスメントから本人の必要としている支援を見出し、対応できるようサービスの内容を検討し実践している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除・食事作り・誕生会・野菜づくり・小物作りなど共にできることを一緒に楽しみ、関係を深めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	介護計画を3か月に1度見直しを家族に送付。家族からのコメントなどを参考にして共に支えていく関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会は365日24時間いつでも対応とし、電話があれば本人との会話ができるようにしている。外食・外出の際は馴染みの場所を確保している。	喫茶店・ジャズ鑑賞・ホテルでのディナー・畑仕事等々、馴染みの場所や習慣を継続的に支援している。友人や幼い頃からの知り合いが訪ねてくれば空いてる和室でゆっくり話ができるよう配慮したり、時々思いを絵手紙にして出す支援など、個々の思いを大切にしている。	宮沢賢治にちなんだ商業・文化施設が近隣には多く、利用者も日常的に親しんでいる。これは他地域にはない魅力ともなっており、今後も地域文化とのつながりは支え続けていってほしい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	関わりあえる利用者は、外出、活動の場など身近に位置するよう支援している。そのことによって支え合える仲間の意識が生まれてきている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	昨年、看取りを行った家族から相談などがあり(家族の状態)支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	・入居時に本人、家族より希望を聞いている ・常に本人の意向についての把握に努めている。3ヶ月ごとのケアプランに家族からの希望の欄を設けている。	センター方式を活用し、本人の考えや希望を聞いたりして思いの把握に努めている。職員と二人だけで話しているときの気持ちや表情から察したり、家族から聞く場合もある。本人が今までやってきた事を継続できるよう、生活歴の把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	・入居時あるいは入居してから日々、生活の中で確認している。(家事、趣味、娯楽等)ミーティングで職員に伝えている。 ・生活歴は特に大切にしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	・就業前に勤務者3人でミーティングし把握の共有に努めている。 ・24時間シートを活用し日中、夜間の状態等把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	3ヶ月に1回のモニタリング、アセスメントを行いその結果を職員が共有し、また家族の面会時、本人の様子を伝え、希望を聞いている。	利用者の状態に応じた課題を「実行シート」を活用したり、職員がケアの気付きを出し合ったり家族の意見を聞いたりして、よりよく暮らせる為の介護計画書の作成となっている。「音楽に親しむ」「草取りをする」等、本人の習慣や意向に沿った視点も重視されている。	利用者の意向・生き方が事業所外の場面でも活かされるよう、地域との関りや馴染みの関係等も介護計画書に組み込まれ「その人らしく」を支える個別介護計画になるよう期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を毎日の業務日誌に記録、理解し職員間でそれを共有し実行している。改めたほうが良いことはすぐに話し合いや24時間シートの活用で見直しをしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々生活の中で要望に応じて対応している。ドライブ、外食、喫茶に行くなどしている。マッサージ師を呼んでいる利用者もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源として、宮沢賢治記念館、新花巻駅、童話村、博物館、保育園などがあり、本人に合った利用のしかたで暮らしを楽しんでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	・できるかぎり家族の協力のもとにかかりつけの病院を受診している。やむを得ない時のみ職員が同行している。 ・緊急時には協力病院を利用している(家族了承のもと)	協力医をかかりつけとする利用者が多く、月1回の往診以外に、緊急時(夜間)も対応しており、利用者全員の健康状態が常に把握されている。その他の医療機関受診も対応している。受診付添いは原則家族対応としているが、都合が悪い場合は職員が付添い支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ケアマネージャーは看護師でもあるので観察のポイント等勉強会を通じて学んでいる。普段の健康を観察し記録し管理している。(V S、W、耳、便など)		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	・入院までの状態の記録を病院に提示している。 ・退院にあたっては、医師からのサマリーを参考にこれからの介護に役立っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化してきている時点で家族に説明し今後の確認をしている。また、終末期については、入居時に説明した後、状態に合わせ意思の確認を家族にした上で協力病院と連携をとっている。	利用者が重度化してきた時点で、家族に説明し家族の希望には最大限応えている。これまで看取りの経験は多数あり、職員は自信を深めると共に記録を反芻しながら更なる質の向上を目指した支援に努めている。「ここで最期まで」という要望は多く、今後も極力要望に応えていく方針である。	医療機関との協力もあって看取りまで支援できる体制が可能なことは、事業所として大きな強みとなっている。看取りの話し合いが持たれた時点から、時系列に出来るだけ詳しい記録を段階的に整備され、意思確認を重ねての確かなプロセスとなっていくことを加えて期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応についての学習会を開き何度も研鑽を積んでいる。対応のしかた、連絡方法、救急車を呼ぶなどのマニュアルができています。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、利用者を含め、自衛消防訓練を全職員で行う。管理権限者、防火管理者、消防士を交え訓練、実施指導。また、防災グッズや食料の補給、点検をおこなっている。地域との協力体制も進んでいる。	年2回(春季・秋季)に地域婦人消防隊協力のもと消防署立会いでの避難訓練を実施されている。緊急時用の防災グッズを備えている。昨年度12月にスプリンクラー設備完了している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者一人一人の人格を尊重し、年長者として敬い、それを態度や言葉かけに反映させプライバシーに配慮するよう常に心がけている。	利用者一人ひとりを年長者として敬い、その方の誇りやプライドを傷つけ無いような声掛けや態度等で支援に努めている。居室内も常時他の人から見える事が無いようなこころ配りがされており、プライバシーに配慮した支援となっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の見守り支援のなかから本人の思い、希望を察知し、その情報を職員間で共有している。できる限りの自己決定を尊重している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人のペースを大切にするために個々に合った支援について話し合い、理解、認識を深めて対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみ、おしゃれには気を配り、散髪は定期的に行い、外出時にはできるだけ本人の好みの洋服で出かけるなどの支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	得意の分野で調理に参加できるよう、畑の収穫から、野菜のきざみ、味付け、おやつ作り、配膳、後片付け等、各人の好みや力に合わせた活動を行っている。主食も一律にせず米飯、粥、麺と柔軟に対応している。また、行事食も楽しんでいる。	献立は栄養士が立て、利用者の病状に合わせた配慮ある調理がなされている。毎日三度の調理は利用者の活動の中に組み込み「出来る事を出来るところまで」を支援している。拘りの調味料として、ノンシュガーを使用している他、職員が育成したハーブが添えられることもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分補給を十分にするため、一人一人の好みによって、飲み物の種類を変えたり、嚥下の状態により、とろみをつけたりしている。また、月ごとの体重変化を見逃さず、食事や間食の量、献立の中身を個別に変えている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	・口腔ケアの研修を受け、勉強会を開き、自分で出来る人は、声掛けで行っている。介助を要する人には、歯や舌の状態を見ながら介助を行い、記録している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	24時間シートを利用して、定期的にトイレ誘導や、サインを見逃さないように排泄の記録をし、トイレ排泄や、排泄の自立支援を行っている。	排泄の改善取組には確実な成果が出ており、個別の排泄リズムが記録として示され、記録を活かした支援で利用者の表情にも安心感が窺える。職員間での士気も上昇し、良い支援がなされている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分補給、運動、食事の工夫をしている。排便の記録を毎日行い必要時、下剤、摘便をしているが自立排便のため繊維の多い食品の摂取に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人一人の希望を聞いている(家族) 脱衣所との温度さを最小限にし体の変化に注意している。 プライバシーを尊重し可能な限り最小の介助としている。事故防止のため、利用者に合わせて、2人介助、3人介助を実施している。	個々の希望や体調を尊重して、1日置き・週2回・足浴・清拭等で対応し支援している。浴槽は個浴とし滑り止めや福祉用具を活用しながらプライバシーに配慮された個別の要望に応じた支援がなされている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の生活リズムを作り、心身の安定をはかり、良眠できる様に援助している。散歩、歌、体操等。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ダブルチェックで薬の管理を行い、一回ごとに渡し、内服を確認している。一人一人が飲んでいる薬の効果、副作用、用量等、一覧にし貼りだしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人が何をしたいのか、できるのか理解し喜んで生活できるように取り組んでいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩、ドライブ、畑、外食等、状態に合わせて数回にわたり外出している。花巻まつりには席を予約してゆっくり楽しめるようにしている保育園の運動会にも参加した。	日常的に希望に添った支援がなされている。特に年1回、市内のホテル関係者の協力で、A棟、B棟全員参加のホテルで行われる「忘年会」は利用者にとって最大の贅沢を味わう機会となっている。重度の方の食べ物は、予め手配し細やかに配慮した支援がなされている。	どんなに重度の利用者であっても外出の楽しみをという思いから、ホテルでのディナーは継続されている。外出機会ということだけでなく、丁寧にもてなされ、豪華な気分を味わえるという側面からも、利用者には非常に楽しみなものとなっており、今後ぜひ継続して取り組んでいってもらいたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出、外食の際に現金を手渡し(1000円程度)買い物や支払を実感して満足感を味わう。(ショッピングモールでの買い物、飲食)		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの贈り物があった場合は、直接家族と話しをしてもらおう。利用者が描いた絵手紙を家族に出し、返事をもらって絆を深めている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共同空間のリビングの音、光、色、広さ、温度に気を使いテーブルの配置を考えて、大人数で、少人数で楽しく過ごせるよう工夫している。	居間と食堂の正面に堂々の薪ストーブが設置されており、炎がもたらす温かさは、誰もがはるか遠い郷愁や記憶が甦り自然に人が集う雰囲気醸成している。天井も高く古民家を連想させて、居心地良く落ち着ける場所となっている。3/11の震災時には、このストーブがおおいに活躍、利用者が自然に集い混雑が起きず暖も取れた。	2棟ある建物には多目的に活用できる部屋が6つあり、金ママの活動や家族や来客の宿泊に使われるほか、現在は沿岸から避難した世帯にも開放されている。様々な交流のきっかけとして意義は大きく、今後有効に活用して行ってほしい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブルの配置、椅子の並べ方などを工夫し、独りでも友達同士でも好きなように過ごせるよう工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたものや好みのものなどは、入居当初から、あるいは必要になった時に持ち込んで居心地の良い居室となっている。	居室は、やや広めでゆったり感が滲み出ている。一人ひとりが思い入れのある机や小箆笥を持ち込み、これらの物は個々の希望に合わせた場所に配置されている。居室の窓から新幹線の駅が眺められ、風景よし、日当たり良しで心地よい環境となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の名札、トイレの場所など分かりやすい表示を取り入れ、手すり、つかまり棒など工夫して設置し自立した生活への配慮がされている。		